

# 令和7年度 学校評価【計画書・報告書】

加賀市立作見小学校 校長 中谷 真由美 印

## 学校教育ビジョン

校訓（建学の精神） **・きたえる・たかめる・思いやる**  
 学校教育目標 「自らのよさを感じ 自ら考え行動する 作見っ子の育成」  
 重点目標 「楽しい学校は、自分でつくる みんなでつくる」3.0  
 ~自分から~ ~みんなのために~

## めざす児童像

○目標をもって、挑戦する子  
 ○学びを楽しみ、学びを生かす子  
 ○人との関わりを大切にし、豊かにつながる子

## めざす教師像

○チャレンジ精神・向上心のある教師  
 ○授業を大切にし、児童を伸ばす教師  
 ○チームで、豊かに育てる教師

評価の項目	今年度の重点目標	具体的な取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果（中間）	判定結果（最終）	今後の改善策
①教育課程・学習指導	自律した学びで育む授業を通して、「考えるつながる 高め合う 作見っ子」の育成を図る。	・算数科においては、数学的な見方・考え方を見出し、児童が自らのよさを感じ、自ら考え行動する「作見っ子」の育成に努める。	研究主任 教務主任	学年や教科・単元に応じて、児童に学びを教える授業を実践してきた。今後は、算数科を中心に、単元構造シート等を活用し、これまで以上に教科の本質に沿って、児童が自らのよさを感じ、自ら考え行動する「作見っ子」の育成に努める。	【成果指標】 自指す授業像に基づいて、自律した学びで育む授業改善に努めている。	自律した学びで育む授業改善に努めているという教職員が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1. 2学期末に教職員にアンケートを実施する。	A		自律した学びで育む授業を目指し、算数科を中心に、他教科においても児童の実態に応じた授業改善を各教職員が継続的に行っている。今後も、日々の授業実践に加え、低・中・高学年のブロック研修を軸として、教職員間で共通理解を深めながら、指導の質の向上を図っていく。
②生徒指導 ※いじめの未然防止	共感的な人間関係を育む	いいね作見小やしゃべくり393の取り組みを通して、共感的人間関係を育む。	生徒指導主任	児童の自己肯定感や自己有用感をさらに高めるために、たくさんの人から認められる経験を重ねていく。いいね作見小やしゃべくり393の取り組みを生かして、共感的人間関係を育む。	【成果指標】 いいね作見小やしゃべくり393の取り組みを積極的に実行している。	「友達のよいところを見つけたり、たくさんの友達と話すことができた」という児童が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1. 2学期末に児童にアンケートを実施する。	A		授業交流した際や様々な活動の後にふりかえりやメッセージを書く活動や、しゃべくり393などの取り組みを通して、共感的人間関係ができつつあるので、今後も継続しながら推進していきたい。
	誰とでも学び合える授業づくりを働きかける	生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりの実践を積み重ねることを通して、いじめの未然防止につなげられるように取り組む。	生徒指導主任	昨年度生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりについて研修を行い、理解を深めた。今年度は授業実践を積み重ねたり、公開授業で話し合ったりなどして意識を高めている。	【成果指標】 生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりを行っている。	「生徒指導の4つの視点を生かして児童に声掛けを行った」という教職員が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1. 2学期末に教職員にアンケートを実施する。	A		年度当初に教職員で共通理解を図り、授業整理会においてもその視点で話し合うことによって意識が高まっている。いじめ対応アドバイザーを活用してさらに意識を高めていく。
③キャリア教育・進路指導	自分の良さに気づき、自ら考えて行動する児童の育成を図る。	行事を中心とした活動の中で自分の良さに気づき、自ら考えて行動するための指導を行う。また、キャリアパスポートを活用し、1年間のめあてを立て、学期ごとに振り返りを行う。	キャリア教育担当	自分の良さを実感できていない児童が多い傾向がある。各種行事や代表委員会を中心には、児童に実感する機会を設けていく。その中で、児童が主体となって学校を作っている実感を持つようにしていく必要がある。	【成果指標】 児童は自分に良さがあると感じている。	「自分には良いところがある」という児童が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	年度当初、1. 2学期末に児童にアンケートを実施する。	B		自分に良さがあると感じている児童が87.8%であった。しかし、自分には良いところが全くないと答えた児童が4.8%（13人）という結果だった。今後も児童の主体性を促すように心がけるとともに、自身の成長を感じられるような取組を粘り強く続けていく。
④保健管理	早寝早起きに対する意識を高める。	・委員会活動で早寝早起きのよさを全校児童に啓蒙する。 ・学校保健委員会で早寝早起きに対する児童と保護者の意識を高め、早寝早起き月間を設定し早寝早起きの習慣づけを図る。	保健主事 養護教諭	これまでのすこやかカードの取組から早寝早起きができるようになって、児童が多く見られるので、早寝早起きに対する意識を高める必要がある。	【努力目標】 早寝早起きに意識して取り組んでいる。	「早寝早起きに意識して取り組んだ」という児童が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1. 2学期末に児童にアンケートを実施する。	B		上位回答が児童は78.4%、保護者74.6%であったが、A回答が児童は43.8%、保護者は31.9%であり、早寝早起きを心がけようとする意識が低い。2学期は、学校保健委員会で家庭との連携を図るとともに、保健委員会による全校への啓発活動を通じて、早寝早起きの意識を高めていく。
⑤安全管理	児童の情報モラル・セキュリティに対する意識を高め、ネットの適切な使い方を実践する。	保護者と連携しながら、家庭におけるゲームやインターネットのルール（デジタルファミリールール）を作成し、適切な利用を行えるようにする。	生徒指導主任	情報通信端末を端末とした児童同士のトラブルが見られるようになり、今後大きなトラブルに発展する可能性がある。そのため全ての児童が適切に情報通信端末を扱えるように児童の意識を高める必要がある。	【成果指標】 ゲーム・インターネットに関するルールを作られている。	「お家の人のゲームのルールを作っている」と答えた児童の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	1. 2学期末に児童アンケートを実施する。	C		児童アンケートでは77%であるが、保護者アンケートでは100%であった。各家庭にルールは存在するが、子どもに浸透していないことが考えられるため、各家庭と協力し、各家庭のルールが浸透する取り組みを行っていく。
⑥特別支援教育	特別な支援を必要とする児童について理解を深め、支援のしかたを検討し実践する。	児童の実態をつかみ、適時校内支援委員会を開いたり専門相談につなげたりしながら、より効果的な支援のしかたを検討、実践する。	特別支援教育コーディネーター 教育相談担当	校内支援委員会でケース会議などを開き、専門相談につなげたり支援の方法を検討したりしている。それぞれのケースについて、支援の方法を探っていくことが必要である。	【努力目標】 支援委員会で、具体的な支援のしかたを決めて、実践しようとしている。	具体的な支援を行うことができたという教職員が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1. 2学期末に教職員にアンケートを実施する。	A		専門相談に繋げたり、校内支援委員会やケース会議を開いたりして、支援の必要な児童について共通理解し、組織的に対応している。医師や外部機関等との連携も続けていく。引き続き、スクールウンセラーにも助言を頂き、今後の支援に繋げていきたい。
⑦組織運営・業務改善	校務分掌やPTA活動の重点化や精選を進める。	運営委員会を活用し、学校経営ビジョンを元に、学校長の目標を校務分掌を共有し、それに従い、業務の重点化や精選を進めていく。	教頭	業務改善の意識は高いが、担当業務による時間外勤務時間の偏りが見られる。どの取り組みを重点とするかや、行事や活動の目的を明確にし、企画・実行していく。	【努力目標】 質の高い教育活動に向け、業務の重点化や精選に取り組む。	「質の高い教育活動に向け、業務の重点化や精選が進んだ」と回答した教職員が A 85%以上である B 75%以上である C 65%以上である D 60%未満である	1. 2学期末に教職員にアンケートを実施する。	B		「質の高い教育活動に向け、業務の重点化や精選が進んだ」と肯定的な回答をした職員は82%であるが、「進んでいない」と回答した教職員は20%近くにのぼる。今後、運営委員会を中心に、行事や活動の重点化に取り組んでいく。PTA活動は、役員の声を聞きながら見直していく。
⑧研修	教員の情報活用能力を育成するための研修を実践する。	PC活用講習会を実施することを通して、日々の実践の交流やPCの使い方、PCを効果的に活用した授業づくりについて教員が学ぶ機会を設け、実践を積み上げる。	教務主任 GIGA推進リーダー	PCの扱いには慣れてきているが、教科の特質に応じた活用やより効果的な実践の機会を増やす必要がある。	【成果指標】 PC活用講習会等の校内研修を経て、教科の特質に応じた活用をする。	研修会を経て、以前より効果的にPC等を活用した授業を行えたと答えた教職員の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	1. 2学期末に教職員にアンケートを実施する。	A		研修会を経て、以前より効果的にPC等を活用した授業を行ったと回答した職員は91%だった。授業の色々な場面でPCを効果的に活用しているという意欲が高い。今後、個に応じた手立てとしてPCが活用できるように校内研修を進めたい。
⑨保護者、地域との連携	学習活動について地域・保護者と連携し、開かれた学校を目指す。	学習の成果物について保護者の感想をもらったり、学校での学びを生かして家庭で取組を行ったりする場面を設定したり、CS等により地域の方の力を借りて、より良い学習活動に取り組む。	教頭	家庭や地域と連携し、より良い学習活動につなげていく。また、学校の取り組みが保護者により伝わるよう工夫する。	【努力目標】 学習の中で、家庭や地域との連携を意識した取組を行っている。	授業等で家庭や地域と連携した取組を行ったと回答した教職員が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 50%未満である	1. 2学期末に教職員にアンケートを実施する。	B		「授業等で家庭や地域と連携した取組を行った」と回答した教職員が77%であるが、授業以外にも夏休みの補充学習や行事の写真撮影など、様々な形で連携を進めてきた。今後もCSを通して地域の方から協力をいただきながら計画的に取組を進めていく。
⑩教育環境整備	児童の安全安心の確保および、より良い学びを実現するための環境を整備する。	より良い学習環境の視点を持って、教室環境を整備するとともに、学期に一度、管理場所の安全点検を行い、不備な箇所については報告し、速やかに対応する。	教頭	不備な箇所の修繕は進んでいるが、今なお修繕が必要な箇所が複数ある。今後も可能な限り改善を進めしていく。	【努力目標】 施設の不備を未然に察知することで、改善を行う。	より良い学習環境の構築の視点を持って、教室環境整備や安全点検に取り組むことができた教職員が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 60%未満である	1. 2学期末に教職員にアンケートを実施する。	A		「より良い学習環境の構築の視点を持って、教室環境整備や安全点検に取り組むことができた」と肯定的に回答した教職員が100%であった。今後も施設の不備が生じたら、早急に連絡・相談し改善につなげていく。

学校関係者評価